

東大見学会

①OBOGによる懇談会

以前僕は、東京大学などの非常に有名で優秀な大学に在籍しておられる仙台二高OBOGの方々と話す機会があった。その内容は、東京大学の利点や学習の仕組み、自らの体験に基づいたアドバイスといったことである。そしてそこから多くのことを学んだ。

懇談会では、先輩方の話や生徒たちからの質問があり、そこで、先輩方の考え、意見等を知った。例えば、勉強のモチベーションを保つ方法は何か?という生徒の質問に対して、答えが、勉強する科目のタイプに応じて勉強の方法を分ける、ということだった。「単語を暗記する」と「文章題を解く」といった異なるタイプを同じ日に勉強することで、単調な勉強にならず、高いモチベーションを保てる、と言うのだ。確かに、今日はこの勉強をしよう、と決めても、同じ行為の繰り返しになってしまい、飽きてしまう。逆に考えると、毎日計画的に勉強を行い、ムラが出ないようにする必要がある、ということだ。

最も印象に残っていることは、受け身になってはいけない、主体的に行動する必要がある、という話だ。例えば勉強では、言われたことだけを行うのではだめだということである。もちろん仙台二高は県内トップレベルで、日々行われる勉強の質も高い。先輩も、2年生の夏ごろまでは学校の勉強をしっかりと行えばいいとおっしゃっていた。しかし、国内、世界トップレベルの大学に入りたとなると、そのころから、苦手な教科を追加で行ったり、塾等に通い、更なる強化をする、といったことが必要なのだ。つまり、周りに流されて行動してしまうのではなく、自らで考える、ということだ。こうして書くと、当たり前のように思えるかもしれないが、このことはとても難しい。人は、周囲と同じであると、安心できる、しかし、周囲と違うと、途端に不安になるのだ。それでも自分が正しい、と思い、その行動を貫くのは、強い信念と覚悟が必要である。

最も納得させられた考えは、すぐ先のことでも、何年か後の遠いことでも、明確な目標を決めるべきだ、という考えである。例えば大学入学では、自分は将来会計士になりたいから、経済学部に入りたい、といった感じだ。このような明確な目標が定まらず、なんとなく学部に入っても、目標がブレてしまい、継続した勉強を行えない。先輩の目標は、高学歴を生かし、将来、高収入の仕事に就くことだった。不純な考えのようにも聞こえるが、このように自分の中にブレない軸を入れることで、勉強を継続できるのだという。

この懇談会で学んだことはとても大きく、且つ参考になるものだった。これらのことを今後の糧とし、生活していきたい。

②ディレクトフォース

僕は、一流企業の方々からお話を伺い、さらに、様々なテーマについて議論または質疑応答をする機会があった。僕がうかがったのは、三菱商事さんである。

まず最初に議論したテーマは、「日本の常識、世界のジョーシキ」というテーマだ。三菱商事の社員さんは、全員とっていいほどの人が、海外研修に行っておられるため、日本と海外の文化や考え方、価値観の違いを実際に体験されている。

僕の考えは、日本人は、外国人と比べは控えめで、あまり自分の意見を積極的に発言しないというイメージがあった。お話を伺うと、そのとおりであることがわかったが、僕は、お話を伺うまで、その理由、背景に何があるのかまではわかっていなかった。社員さんの話では、それは、日本が外国のような多民族国家ではなく、単一民族国家であるからだという。多民族国家である場合、民族が異なると、考え方も異なる。そのため、当然相手

はこう思っているだろう、というのが通用しない。したがって、損をしないためにも、自分の言いたいことをはっきり相手に伝える必要がある。そうすると、必然的に、どんな相手でも自分の意見、考えをはっきり言うことになる。しかし、日本は単一国家、つまり民族が一つしかないため、考え方が大体同じなのである。そのため、自分の考え、意見を積極的に伝えなくとも、相手は大体わかってしまうのである。まさに以心伝心なのである。そのため、自分から積極的に発言しないのだという。

このことは、背景に何があるのか関係なく日本人の悪い所だと思う。何かを伝える、というのは日常生活や学校、職場でも非常に大事なことである。ただでさえ自分の意見、考えを相手に伝えるというのは難しいことであるのに、それを積極的に行わない、というのはあまり褒められたことではない。しかしこれは、個人の意識で解決することなのである。最初は抵抗があるかもしれないが、どんどん自分の意見を表に出していけばよいのだ。

しかしこれは日本国内であればの話だ。前述したとおり、相手に伝える、というのは難しい。これが外国の人相手に、となると、言語も異なり、さらに困難なものとなる。ではこのような時、我々はいったいどうすればよいのであろうか。このような経験のある三菱商社の社員さんによると、とにかく必死に伝えようとするのだという。単純なように聞こえるが、これが最も良いのだ。まず自分が必死になることで、自然と身ぶり、手振りを使い、より効果的に伝わる。言語は異なっても、身振り手振りはある程度共通であるからだ。このように必死になって何かを伝えようとする人を見ることで、聞いている相手も、一生懸命理解しよう、という気持ちになるのだという。この相乗効果により、言語の違うもの同士でも、意思の疎通がよりスムーズになるのだという。

次に議論したテーマは、「学生時代に培う力」である。僕の考えのキーワードは、「部活」である。部活というのは、公立高校では、多くあり、入部が義務化されているところもあるが、私立の進学校となると、勉強が重要視され、部活は敬遠されがちのように思える。しかし僕は、学生生活において部活とは、社会に出てから重要となるいくつかの能力を培うものだと考える。なぜなら、ほかの部員たちと一緒に練習、団体戦ならば試合もすることで、協調性、集団生活における身の置き方を学ぶことができるからだ。これらの力は、社会に出る以上避けて通れない会社での生活に繋がっていく。また、部活により、先輩、後輩との上下関係も学ぶことができる。これもまた、会社での生活、先輩後輩と共同で行う仕事にも繋がっていく。僕のこの意見聞いて三菱商事の社員さんは、実際の仕事を部活経験者で行い、確かに部活未経験者と比べ、協調性が高いとおっしゃっていた。また、部活の部長、副部長を経験することで、多くの人をまとめ上げる力がつくという。

そこから、グループをまとめるためにはどうすればよいか、という話になった。グループをまとめるには、ただ単に指示を出せばいいというわけではない。社員さんの考えは、グループの一人一人をしっかりと見て、理解してあげることが大切なのだという。その上で、誰にどのような指示を出せばよいかを判断する、とおっしゃっていた。

また、社員さんは、学生時代は、様々なことにチャレンジすべきだ、やろうかどうか迷っているならばやったほうが良いとおっしゃっていた。理由は、その人の価値観が学生時代に形成されつつあるからこそ、その時にしかできない多くのことを体験し、刺激を受けることで、よりよい価値観が形成されるからだそうだ。

今回、三菱商事の社員さんとディスカッションを行うことで、僕が今後すべきことがより明確になり、よりよい価値観が形成されたと感じる。ここで学んだことを今後実践し、さらなる成長をしていきたい。

以上